12の講義内容　文章作成能力開発その1

2006.07.03～2010.06.29更新

はじめに

人が不特定多数の人を理解するために、「作文」とか「小論文」といった文章を作成することが多くなってきている。昨今、こうした自己が感動したり、気がついたことを文章にする「作文」、自己が疑問に思ったり、問題視したことを先学の研究書をふまえて調査した結果を精確に整えながら意見・主張を述べていく文章である「小論文」などをどのように学習していくのかが現代の若者に問われてきている。

「人が不特定多数の人を理解する」とは、ひとり一人を大切に知り尽くす最も有効な手段であり、その導入部に「文章作成」のことがらが位置している。

いわば、1,「人間性を測る」方法と云っても良かろう。古諺に「文は人なり」と云う。この人という個体を意識して測るに、まず、人それぞれ、千差万別の性格をキャッチすることが測る側に要求されている。これを読み取る能力手法として、第三者である人が文章に書いたことがらを読みながら見ていくのだ。さらに、2,「教養性を見抜く」法。3,「意欲度を測る」法。4,「思考性を見抜く」法。5,「適性力を測る」法。6,「言語能力を見定める」法といった観点で、人を人が判断していくのが「文章」、すなわち、この「作文」とか「小論文」の役割なのである。

文章作成能力の開発とは

人が人を知る、その人の「性格・教養・意欲・思考・適性・言語能力」を高めていくことは、日々のとめどもなく繰り返されていく人の生活設計につながっている。人生の仲間である親・兄弟・姉妹といった家族にはじまり、塾・学校などの教育現場では「師＝師匠」を得、「竹馬の友」といった友人、そして知人、年成りて「恋する人」「愛する人」、職場での上司・同僚・部下、さらには、趣味や地域社会活動・国際社会全般に亘って人と接する機会は数限りなく存在する。この人たちと、どのように接するのかその度合いが自己の「性格・教養・意欲・思考・適性・言語能力」を変容させていくのである。

この変容させていく基盤を知っておくことが肝要なのである。そのうえで、どの「基盤」をどのように役立てていくのかをまず自らが決めていくことが大切なのである。

文章作成能力の開発のはじまり

では、「文章作成能力の開発」を開始することにしよう。まず、何より書くことから始めたい。でも、ただ闇雲に書いていくのは単簡すぎるではないか。「弘法筆を選ばず」なんて格好いいことはできない。それ故に、書くために必要となる道具を用意するのである。紙と筆(今は、鉛筆・万年筆・ボールペンなど)を用意する。紙は、文章作成を引き出すのであるから、やはり四百字詰めの原稿用紙が最適である。この原稿用紙に書き出すことで、書こうとする気持ちも涌出てこよう。もっと最上なものはと問われれば、それは和紙に勝るものはない。数千年の人類の歴史や記録に耐えうる代物だからだ。「ハプティック【ＨＡＰＴＩＣ】＝触覚」を知ることもその最上性の方法としてふさわしいと言えよう。

書けば書くほど文章が書けるようになる。努力して書かない限り、文章は上達していかぬと思うことだ。誰もが最初から旨くなど書けるものではないからだ。旨い文章に出会ったら、何度も何度もその文章を書き写すこと、これが意外と文章上達の径捷(ちかみち)であることを知る人は少ない。毎日の新聞の“余録”や“天声人語”“編集手帳”などを書き写すのも良かろう。そこで、事例を一つだけ用意したので、観て書いて欲しい。

《二〇〇六年六月二十九日付・読売新聞「編集手帳」より》

ラジオが告げたことには、「敵機は百五十機、帝都に侵入の恐れあり。警戒を要す」。空前の大空襲に人々は度を失ったと、作家の海野十三が書いている◆「百五十機」は「薄暮時期」の聞き間違いだった。「情報はもっとやさしくすべきである。いつも小むずかしくいう軍人の頭の具合にも困ったものである」（中公文庫「海野十三敗戦日記」）◆軍人の頭は戦後、官僚機構に引き継がれた。遅ればせながらも、頭の切り替えがはじまるのはいいことだろう。分かりにくいと評判の悪かった洪水用語を国土交通省が改めるという◆これまでの「破堤（はてい）」が「堤防の決壊」に、「排水機場」が「排水ポンプ場」に、「法崩（のり）れ」が「堤防斜面の崩れ」に――といった具合に、数十の用語が見直される◆いざという時の情報は耳で聞いて意味が伝わらないと、一瞬の混乱が生死を分けるもとにもなる。地震、津波、テロ…と、防災用語を総点検していけば、当節版「薄暮時期」はまだほかにも見つかるに違いない◆以前、詩人の谷川俊太郎さんや大岡信さんが編集した小学1年生向けの国語読本「にほんご」（福音館書店）を読んでいて、感じ入ったことがある。擬音語を「おとまねことば」、擬態語を「ありさまことば」と言い換えてあった。要は、伝える相手の身になって考える心だろう。（2006年6月29日1時37分　読売新聞）

でも、もっと長い文章を選んで、これを全部書き写す。丸写しにすると言うことは、実は書記者の身も心もすべて理会して書き手の癖までも知ることにつながるからだ。文章を書こうとするのであれば、一度はやっておきたい作業の過程なのである。是非、お試しあれ!!。

それも、ご自分が一番氣に入った文章を書き写すことを私は奨めたい。人からお仕着せに聞いて書く文章は、なぜかちっとも身に付かないからだ。実に不思議なことであるが、本統にそうであるが故にこう伝えておく。これが最大の上達法というところか。私は、この方法で某甲作家の文章を全部写したことがある。書き写したことのない人にどう説明してもこれ以上の共感が得られないのが事実であるからして、これ以上は触れないでおく。ただ一つだけ伝えておこう。難解な語や漢字に直面したときなど、必ず「国語辞典」乃至、「漢和辞典」を繙くことを奨める。自分で率先して繙くように常日頃から愛用の辞書を持つことである。私の愛用の「国語辞書」は、新潮『国語辞典』第二版を用いてきている。これを手控えにそこにメモ書きして書込み記録しておくことは、後々自分専用の語辞書を獲得していくのと同じことになる。

「名文」に触れてみよう――「ハプティック【ＨＡＰＴＩＣ】＝触覚」な技法――

世に言う「名文」とは、こうした良き文章に出会い、多くの人々がその特徴点を認めてこそ「名文」たる所以となり得るのである。名文の元祖とも言える作品は現代から見ていくと、何と奥深い世界へと向かっていることに氣づかされる。たとえば、短編小説の神様である志賀直哉は、作家井伏鱒二がこよなく愛した作家でもある。近代小説の生みの親ともいう夏目漱石を作家芥川龍之介が尤も師事した近代の作家ということもある。その志賀直哉は、誰を師事し、また、夏目漱石は誰を師事したのかと見ていくと人の永続的な営みが見えてくるからだ。

《名文ことばの実際》

◇志賀直哉『**城の崎にて**』

山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした。其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に言われた。二三年で出なければ後は心配はいらない、兎に角要心は肝心だからといわれて、それで来た。〈中略〉

自分の部屋は二階で、隣のない、割に静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。其の羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな肥った蜂が天気さえよければ、朝から暮近くまで毎日忙しそうに働いていた。〈中略〉ある朝の事、自分は一疋の蜂が玄関の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巣の出入りに忙しくその脇を這いまわるが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立

働いている蜂は如何にも生きている物という感じを与えた。その傍らに一疋、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに転がっているのを見ると、それが又如何にも死んだものという感じを与えるのだ。それは三日ほどその儘になっていた。それは見ていて、如何にも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巣に入って仕舞った日暮、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見る事は淋しかった。然し、それは如何にも静かだった。〈下略〉

◇宮澤賢治・童話『マグノリアノ木』

霧がじめじめ降っていた。

諒安は、その霧の底(そこ)をひとり、険しい山谷の、刻みを渉って行きました。

沓(くつ)の底を半分踏(ふ)み抜(ぬ)いてしまいながらそのいちばん高い処からいちばん暗(くら)い深(ふか)いところへまたその谷の底から霧に吸(す)いこまれた次の峯へと一生けんめい伝って行きました。

もしもほんの少しのはり合で霧を泳いで行くことができたら一つの峯から次の巌へずいぶん雑作もなく行けるのだが私はやっぱりこの意地悪い大きな彫刻の表面に沿(そ)ってけわしい処ではからだが燃(も)えるようになり少しの平らなところではほっと息をつきながら地面を這(は)わなければならないと諒安は思いました。

全(まった)く峯にはまっ黒のガツガツした巌が冷(つめ)たい霧を吹(ふ)いてそらうそぶき折角いっしんに登って行ってもまるでよるべもなくさびしいのでした。

それから谷の深い処には細かなうすぐろい潅木がぎっしり生えて光を通すことさえも慳貪[#1]そうに見えました。

それでも諒安は次から次へとそのひどい刻みをひとりわたって行きました。

何べんも何べんも霧がふっと明るくなりまたうすくらくなりました。

けれども光は淡く白く痛く、いつまでたっても夜にならないようでした。

つやつや光る竜の髯[#2]のいちめん生えた少しのなだらに来たとき諒安はからだを投(な)げるようにしてとろとろ睡(ねむ)ってしまいました。

(これがお前の世界なのだよ、お前に丁度あたり前の世界なのだよ。それよりもっとほんとうはこれがお前の中の景色なのだよ。)

誰かが、或いは諒安自身が、耳の近くで何べんも斯(こ)う叫んでいました。

(そうです。そうです。そうですとも。いかにも私の景色です。私なのです。だから仕方がないのです。)諒安はうとうと斯う返事しました。

(これはこれ　惑(まど)う木立の　中ならず　しのびをならう　春の道場)

どこからかこんな声がはっきり聞(きこ)えて来ました。諒安は眼(め)をひらきました。霧がからだにつめたく浸(し)み込(こ)むのでした。

全く霧は白く痛く竜の髯の青い傾斜はその中にぼんやりかすんで行きました。諒安はとっととかけ下りました。

そしてたちまち一本の潅木に足をつかまれて投げ出すように倒(たお)れました。

諒安はにが笑(わら)いをしながら起(お)きあがりました。

いきなり険しい潅木の崖(がけ)が目の前に出ました。

諒安はそのくろもじの枝(えだ)にとりついてのぼりました。くろもじはかすかな匂を霧に送(おく)り霧は俄かに乳いろの柔らかなやさしいものを諒安によこしました。

諒安はよじのぼりながら笑いました。

その時霧は大へん陰気になりました。そこで諒安は霧にそのかすかな笑いを投げました。そこで霧はさっと明るくなりました。

そして諒安はとうとう一つの平らな枯草の頂上に立ちました。

そこは少し黄金いろでほっとあたたかなような気がしました。

諒安は自分のからだから少しの汗の匂いが細い糸のようになって霧の中へ騰って行くのを思いました。その汗という考から一疋の立派な黒い馬がひらっと躍り出して霧の中へ消えて行きました。
霧が俄かにゆれました。そして諒安はそらいっぱいにきんきん光って漂う琥珀の分子のようなものを見ました。それはさっと琥珀から黄金に変りまた新鮮な緑に遷ってまるで雨よりも滋く降って来るのでした。
いつか諒安の影(かげ)がうすくかれ草の上に落(お)ちていました。一きれのいいかおりがきらっと光って霧とその琥珀との浮遊の中を過(す)ぎて行きました。
と思うと俄かにぱっとあたりが黄金に変(かわ)りました。
霧が融(と)けたのでした。太陽は磨きたての藍銅鉱[#3]のそらに液体のようにゆらめいてかかり融けのこりの霧はまぶしく蝋のように谷のあちこちに澱(よど)みます。
(ああこんなけわしいひどいところを私は渡(わた)って来たのだな。けれども何というこの立派さだろう。そしてはてな、あれは。)
諒安は眼を疑いました。そのいちめんの山谷の刻みにいちめんまっ白にマグノリア[#4]の木の花が咲(さ)いているのでした。その日のあたるところは銀(ぎん)と見え陰になるところは雪のきれと思われたのです。
(けわしくも刻むこころの峯々に　いま咲きそむるマグノリアかも。)斯う云(い)う声がどこからかはっきり聞えて来ました。諒安は心も明るくあたりを見まわしました。
すぐ向うに一本の大きなほおの木がありました。その下に二人の子供が幹を間にして立っているのでした。
(ああさっきから歌っていたのはあの子供らだ。けれどもあれはどうもただの子供らではないぞ。)諒安はよくそっちを見ました。
その子供らは羅[#5]をつけ瓔珞[#6]をかざり日光に光り、すべて断食のあけがたの夢のようでした。ところがさっきの歌はその子供らでもないようでした。それは一人の子供がさっきよりずうっと細い声でマグノリアの木の梢を見あげながら歌い出したからです。

「サンタ、マグノリア、枝にいっぱいひかるはなんぞ。」
向う側の子が答えました。
「天に飛びたつ銀の鳩。」
こちらの子がまたうたいました。
「セント、マグノリア、枝にいっぱいひかるはなんぞ。」
「天からおりた天の鳩。」
諒安はしずかに進んで行きました。
「マグノリアの木は寂静印[#7]です。ここはどこですか。」
「私たちにはわかりません。」一人の子がつつましく賢こそうな眼をあげながら答えました。
「そうです、マグノリアの木は寂静印です。」
強いはっきりした声が諒安のうしろでしました。諒安は急いでふり向きました。子供らと同じなりをした丁度諒安と同じくらいの人がまっすぐに立ってわらっていました。
「あなたですか、さっきから霧の中やらでお歌いになった方は。」
「ええ、私です。またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたが感じているのですから。」
「そうです、ありがとう、私です、またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたの中にあるのですから。」
その人は笑いました。諒安と二人ははじめて軽く礼をしました。
「ほんとうにここは平らですね。」諒安はうしろの方のうつくしい黄金の草の高原を見ながら云いました。その人は笑いました。
「ええ、平らです、けれどもここの平らかさはけわしさに対する平らさです。ほんとうの平らさではありません。」

「そうです。それは私がけわしい山谷を渡ったから平らなのです。」
「ごらんなさい、そのけわしい山谷にいまいちめんにマグノリアが咲いています。」
「ええ、ありがとう、ですからマグノリアの木は寂静です。あの花びらは天の山羊の乳よりしめやかです。あのかおりは覚者たちの尊い偈[#8]を人に送ります。」
「それはみんな善です。」
「誰の善ですか。」諒安はも一度その美しい黄金の高原とけわしい山谷の刻みの中のマグノリアとを見ながらたずねました。
「覚者の善です。」その人の影は紫いろで透明に草に落ちていました。
「そうです、そしてまた私どもの善です。覚者の善は絶対です。それはマグノリアの木にもあらわれ、けわしい峯のつめたい巌にもあらわれ、谷の暗い密林もこの河がずうっと流れて行って氾濫をするあたりの度々の革命や饑饉や疫病やみんな覚者の善です。けれどもここではマグノリアの木が覚者の善でまた私どもの善です。」
諒安とその人と二人はまた恭しく礼をしました。

●語注

#1　慳貪＝無慈悲の意味。#2　竜の髯＝植物名。ユリ科の常緑多年草。ジャノヒゲ。#3　黄金いろ＝「聖なる色」を示す。#4　琥珀＝松ヤニの化石。#5　藍銅鉱＝鉱物名。藍青色で、ガラスのような光沢がある。#6　マグノリア＝モクレン科の植物の総称。ここでは、コブシを指す。#7　羅＝薄物。薄く織った織物またはその織物で作った夏用の衣服。#8　瓔珞＝仏像の装飾に用いられるインドの装身具。#9　寂静印＝仏教の絶対基準の1つ、「悟りの境地」のこと。#10　偈＝仏教の真理を述べた韻文。

《参考となる日本語の「名文」資料》

※「名文」〔HP参照千年の日本語。名言・名句マガジン〕http://nobunsha.jp/meigen.html
※今日の名言〔岩波書店〕　http://www.iwanami.co.jp/meigen/
※名言・名句辞典〔メルマガスタンド〕http://www.melma.com/backnumber_85215/
※日本文学名作名文館　http://www.nextftp.com/kamiogallery/
※山口　翼著『志賀直哉はなぜ名文か―あじわいたい美しい日本語』〔祥伝社新書〕
※CD-ROMらくらくマスタータッチタイピング名文百打ちVer.2（名文を打って自然に上達）日本経済新聞社
※「NHKにほんごであそぼ～名文しりとり～」http://wmg.jp/artist/nihongo/WPCL00001O264.html
（01.『源氏物語』紫式部　02.「積った雪」金子みすゞ　03.『蝸牛』幸田露伴　04.『論語』孔子　05.『蜘蛛の糸』芥川龍之介　06.『枕草子』清少納言　07.しじうろく　08.『雪国』川端康成　09.たとえ火の中水の底　10.『心よ』八木重吉　11.『蝸牛考』柳田国男　12.『山椒魚』井伏鱒二　13.『銀河鉄道の夜』宮沢賢治　14.「サーカス」中原中也　15.『傾城阿波の鳴門』　16.小林一茶　空腹に雷ひびく夏野哉　17.種田山頭火　何おもふともなく・・・　18.『曽根崎心中』近松門左衛門　19.松尾芭蕉　閑さや岩にしみ入蝉の声　20.『東海道中膝栗毛』十返舎一九　21.『太陽』八木重吉　22.『粱塵秘抄』　23.「片恋」北原白秋　24.松尾芭蕉　夏草や兵どもが夢の跡　25.「冬が来た」高村光太郎　26.尾崎放哉　たった一人に・・・　27.『金色夜叉』尾崎紅葉　28.『人間失格』太宰治　29.小林一茶　雀の子そこのけそこのけお馬が通る　30.『ぴっとんぺぺぺ』おおたか静流　31.「春宵感懐」中原中也　32.正岡子規　くれなゐの・・・　33.「呼声」　34.「こころ」金子みすゞ　35.『太平記』玄恵法印　36.種田山頭火　うしろすがたの・・・　37.『竹取物語』　38.『方丈記』鴨長明　39.「春夜」蘇軾　40.「泣いた赤おに」浜田広介　41.「夢みたものは・・・」立原道造　42.ちうちうたこかいな　43.『菅原伝授手習鑑』　44.十六夜の月　45.「二人大名」　46.ボーナストラック　「私と小鳥と鈴と」金子みすゞ　山口県長門市　47.ボーナストラック　「私と小鳥と鈴と」金子みすゞ　茨城県土浦市）
※名文美術館　http://bunkadou.main.jp/bunka/meibun/b_meibun.html

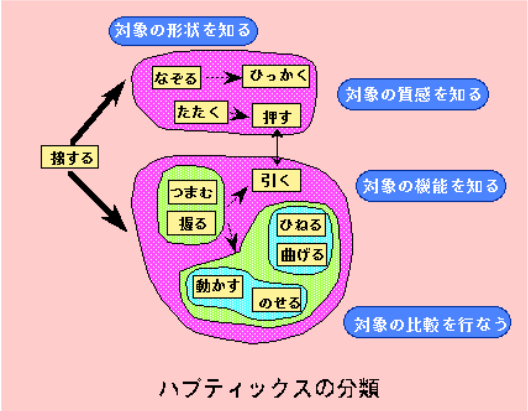
《補注》

①「ハプティック【ＨＡＰＴＩＣ】＝触覚」…

ハプティック知覚は、いくつかの動作に分類ができる。Ledermanらは、このような言語動作を十二に分類している。

A形状を知覚・B質感の知覚・C機能の知覚・D比較の実施

1「接する」・2「なぞる」・3「引っ掻く」・4「叩く」5「押す」・6「引く」7「抓む」・8「握る」・9「捻る」・10「曲げる」・11「動かす」・12「乗せる」



ハプティックスの分類

「道」を極めていく

日々書き続ける修練・鍛錬は、多くの「道」という語を添える日本文化の精神修養の世界にあって、欠かせないことば表現である。この文章作成の道も「文章道」と云う精神修養の世界にあることは慥かだ。「書道」では、「習うより慣れろ」と教わる。最初から師匠の手ほどきを受けるなど以ての外の世界なのである。師匠の居に住まわせてもらい、毎日経験する生活習慣は、日々の家事や家の雑事や労働の手伝いに過ぎないとぼやく輩もいるだろうが、実は「習うより慣れろ」とは、師匠の日々の仕業や言動をちゃっと盗めということに尽きるからなのだ。コツをつかむ、そこからがはじまりである。何事も始まりが肝腎なことは云うまでもない。見よう見まねで始めても、コツだけは容易に身に付くものでない。このコツだけは、師匠に手合わせしてもらう必要がある。この手合わせに挑むまでの姿勢とその準備が物事を如何様にも決めていくことになる。一人で向かうのも良かろう。時には友人と二人して向かうのもよかろう。辛いように見えるが、この瞬間(瞬きをするかしないかの僅かな時間)が「道」の極意だと思うと愉しくなってくる。「文章道」という観点で云えば、自分の書いた文章を第三者に読んでもらうこと。時には添削を受けることなのだ。自分より秀でた人物に手直しを受けてこそ、自身の美事さ、駄目さがものの見事に見えてくるから不思議だ。自分以外の人は、こうした別の角度で物事を見ようとしているのだということを知る手がかりとも成るからだ。実に大切な時間である。学校には指導教員が複数いる。この複数の教員にそれぞれ自分の書いたものを見てもらうことを心がけよう。きっと、今までにはなかったコミュケーション力の何かが始まるであろう。この稚拙なと思っている文章を添削していただくだけでも、その力量は大きく変化していくはずだ。しかし、本當はここからが大事なのである。添削の入った文章をすぐに、読んだからといってゴミ箱に投げ捨てるのはやめよう……。自分の目に付く場所に常に貼っておき、日々何度となく眺めてこそ手本となるからだ。貴重と思えるものは、目に触れる場所を選んで掲示しておくということが実は肝要なのだ。この姿勢を不断から養おう。その繰り返しが、上達の道であるからにほかならない。決して、鞄や机の引き出しの奥底に眠らせたりしないことを意識して、いつも辞書と同じように、目の届く範囲に置いておきたい。この心がけであなたの文章は、血となり肉となって身についてくること間違いなしだ。この基本姿勢が何よりも大切なのだから……。

夏目漱石著『坊っちゃん』に、住み慣れた東京を離れ、四国愛媛の中学校に赴任した主人公が、「清」という仕女に手紙を往返するやりとりのなかで、赴任先のことを具さに報告し、見知らぬ人との社会での世渡りをしていく極意を学ぶことが書かれている。ここで、「清」の忠告を坊っちゃんは素直に受け止め、これを全て生かせたかどうかは些か疑問ではあるが、その基本姿勢は正しい。人に見てもらうことで自分が見えてくることを常々忘れないことにあるからだ。昔も今も人の書く営み、読む営みは大凡にして変わらぬ世界がここには顕れている。